

第2日目(8月27日) 午後 第1室(102講義室) (3) 12:30 (4) 13:10

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(3)	研究発表	中学	語彙	日臺滋之(玉川大学)	日英パラレルコーパス EasyConc_tagged.xlsxを用いた 文法事項の検索—授業への活用—	コーパスと言えば、表現できたことを集めて構築したものである。しかし、本発表のEasyConc_tagged.xlsxは、学習者がコミュニケーション活動で、英語で表現できず諦めてしまったことを後から日本語で書いてもらい、英語に直し日本語と英語の一対一対応にして構築したコーパスである。学習者が表現できなかったことを集めたという点で、通常のコーパスと異なる。EasyConc_tagged.xlsxにより学習者の英語苦手表現がわかかってきた。例えば、文法の観点では、「(特に)何もすることがない」(have nothing special to do)や接続詞whileに関する質問が多い。生徒の言えなかった表現を突き止め、フィードバックする工夫は、生徒の表現力を伸ばすために必要である。本発表では、実際にEasyConc_tagged.xlsxを用いて、どのように教材作成に繋げていったらよいか提案する。
(4)	研究発表	その他	語彙	森本 俊(常磐大学)	第二言語学習者による「訳語を対応させる方略」の使用に関する研究—基本動詞breakの習得に焦点を当てて—	本研究は、異なる習熟度の日本人英語学習者168名による「訳語を対応させる方略」の使用を、基本動詞breakを素材に調査した。参加者は、与えられた39個の名詞に対して、それぞれがどの程度break可能であるかを5段階で判断するテストに回答した。39個の名詞は、(1)日本語の「こわす」及び英語のbreakが共に使えるもの、(2) breakを使うことができるが、「こわす」は使えないもの、(3)「こわす」を使うことができるが、breakは使えないもの、という3つの領域に属しており、各領域から13個の名詞が出題された。テストの結果から、日本人英語学習者は習熟度に関わらずbreakの意味を過少汎化及び過剰汎化する傾向が高いことが示され、「訳語を充てる方略」の影響が強固であることが示唆された。

第2日目(8月27日) 午後 第2室(103講義室) (3) 12:30 (4) 13:10

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(3)	研究発表	大学	文法	柳川浩三(法政大学)・大和田和治(立命館大学)	学習者の五文型に対する意識と、理解度と、熟達度との関連	本研究では、学習者(大学生)が五文型をどのように受けとめ、どの程度理解し、五文型に対する理解がどの程度彼らの英語力に寄与しているかを検証した。大学生計1,069名を対象に、多肢選択式と自由記述からなるアンケート用紙と、開発した「文法基礎テスト」を用いて調べた。その結果、大学生の五文型への理解度に対する自己評価は必ずしも高くなく、初学の理解度がその後も維持される傾向にあること、その一方で、8割の大学生が五文型は英語を理解する上で有用かつ必要であると認識していることが示された。また、理解度については、平均正解率は57.8%であった。学習者共通の実態として1)多義動詞(例、keep)による混同、2)第3文型を第1文型と混同等が指摘された。熟達度の関連については、「文法基礎テスト」との相関係数は、TOEIC総点とは0.32、TOEIC Lとは0.14、TOEIC Rとは0.35であった。
(4)	実践報告	中学	文法	奥村耕一(神奈川県横浜市立都田中学校)	中学校段階における後置修飾による名詞句の認識を高める教材開発—修飾の関係を実感しながら意味と形式に焦点をあてる言語活動の実践—	中学校段階における後置修飾の定着は難しく、次期学習指導要領でも示されている語順や修飾関係など日本語との違いに留意して指導するためには、単に修飾のメカニズムの説明や単語の並べ替えの練習にとどまらずに、使用することを想定した言語処理をさせる必要がある。当学会の研究大会でも発表をさせていただいた後置修飾による名詞句の意味解釈に関する調査結果から、名詞句内部の修飾と被修飾部分の名詞を意図的に入れ替えると、とたんに生徒の意味解釈が曖昧になることがわかり、名詞句内部の構造理解を促す言語活動の開発が必要になった。本実践では、カード、封筒、ボードなど学校現場で用意しやすい材料を用いた3種類のゲームを開発し、生徒がゲームを行うにあたり、後置修飾による名詞句内部の構造を意識せざるを得なくなる状況に追い込まれるようになった。その結果、ゲームの前後に行ったテストでは、名詞句の構造理解が促されたことがうかがえた。

第2日目(8月27日) 午後 第3室(104講義室) (3) 12:30 (4) 13:10

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(3)	研究発表	中学	動機	金子義隆(明海大学)	英語好感度・得意度と学習動機との関係—中学生意識調査の分析を通して—	新学習指導要領の柱の一つ「学びに向かう力・人間性」であるが、この「学びに向かう力」をどのように育成するのは大きな課題である。首都圏のある市町村の3校の中学生735名に「中学校での英語学習」・「学校外での英語学習」・「英語学習動機」について意識調査を行った。英語の認識(好感度と得意度)に応じて4つのグループに分けた。「好きで得意」群は「将来、英語を使って仕事をしたい」とか「世界で活躍する人になりたい」と思う傾向にあるが、「嫌いで不得意」群はそれに対して正反対の傾向がある。英語が好き・嫌いの理由を分析すると、英語に対して自己効力感を感じれるかどうかで英語を「好き」、そして「得意」と判断する基準になっていることが示唆される。英語が「できる」、授業が「わかる」ことを通して、英語に対する自己効力感(有能感)(Deci & Ryan, 1985)を高めることが学習への意欲、つまり「学びに向かう力」を引き出すカギであると言えそうである。
(4)	研究発表	大学	動機	岩本典子(東洋大学)	内発的・外発的動機が理工学部生の英語学習にもたらす影響について	東洋大学理工学部では、英語を聞き話す機会を増やすことにより内発的動機を高め、キャリア教育を組み込んだ英語授業により外発的動機を高める試みを行った。理工学部1年生706名を対象に、自己決定理論に基づくアンケート調査を実施し、内発的動機と外発的動機の英語学習行動への影響について調査した。構造方程式モデリングでは、内発的動機と外発的動機の両方が理工学部生の英語学習行動に影響を与えていたが、前者の影響の方が大きかった。英語習熟度の高い学生102名において外発的動機の影響が強く見られた。これは英語力のある学生は実際にツールとして英語を使用することができるため、その重要性をより認識しているのだと考えられる。一方で、英語習熟度の低い学生124名については、内発的動機と外発的動機は英語学習行動へ直接の影響はなかったが、「国際的志向性」と「英語で対話する意思」を通じて、英語学習行動への間接的な影響が見られた。

第2日目(8月27日) 午後 第4室(201講義室) (3) 12:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(3)	研究発表	高校	教員	望月正道(麗澤大学)	若手教師の3年間の成長—計量テキスト分析から見えてくるもの—	授業研究は、教師や参加者が授業を振り返り、良かった点や問題点を挙げ、改善策について意見交換する場である。授業研究を対象とする研究では、参加者の発話を逐語記録して、それを質的に分析する方法が広く採用されている。樋口(2014)は、テキスト型データに計量的分析手法によって、質的研究では見過ごされていたようなデータの側面が明らかにできるとしている。本研究は、若手高校英語教師の3年間9回の授業研究協議の逐語記録に対して計量的テキスト分析を行い、探索的データ解析を行う。授業研究協議はICレコーダーで録音し、逐語記録を作成した。逐語記録をKH Coder(樋口, 2014)で分析し、頻出語を抽出し、頻出語どうしの対応分析を行った。3年間の授業研究協議において頻出語がどのように変化したかを読み取ることによって、参加者は若手教師の授業の何に意見を交わし、若手教師はどのように成長したかの示唆が得られる。

第2日目(8月27日) 午後 第5室(202講義室) (3) 12:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
--	----	----	----	-----	------	------

(3)	研究発表	大学	リーディング	政所里佳(筑波大学大学院生)	内容理解のための読解はテスト解答のための読解と異なるか—発話プロトコルと事実質問・推論質問を用いた検証—	学習者が英文理解に成功するには、限られた認知資源を効率的に利用し、読みの目的に合わせて柔軟に読解処理を調整することが重要となる。本研究は、(a) 内容理解、(b)多肢選択式テスト解答、(c) エッセイ型テスト解答という読解目的が、読解処理やテキストの理解に与える影響を検証した。日本人大学生・院生38名が、(a)~(c)の目的で3つの説明文を読解した。読解中に考えていることを口頭で報告させる思考発話法により読解中の処理を、テキストに関する事実質問・推論質問により異なるレベルのテキスト理解を測定した。その結果、読解処理やテキスト理解に読解目的による差は見られなかった。しかし、発話の産出割合と各質問の得点との相関分析から、読解目的により一部の読解処理とテキスト理解の関係性は異なることがわかった。この結果を、学習者が特定の読解処理に従事する理由の観点から考察し、読解指導について示唆が得られた。
-----	------	----	--------	----------------	--	--

第2日目(8月27日) 午後 第6室(203講義室) (3) 12:30 (4) 13:10

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(3)	研究発表	その他	言語習得	森本 智(大東文化大学)	主節の主語に位置する関係節	中学生の主語把握を追跡調査した金谷他(2015)の結果と分析はメンタル・スペース理論に矛盾しない。Fauconnier(1994)によると人が談話中に作る親スペースと子スペースは前提を継承しても異なる時間帯を占める。一方、Langacker(2009)によるとイベントは時間帯に縛られるが「物」は時を違えて存在する。聞き手が親スペースの前提を維持しつつ子スペースでイベントを処理すると「物」としての理解が生じ、名詞句理解が起こるのだろう。データベース(MacWhinney, 2000)から入手した母語話者幼児の発話から、関係節を含む主語の前には子スペースを作る予告(例: only)があることがわかった。(例) The only thing I did was play outside. (Abe; 4;10, Kuczaj)。聞き手がこの予告に従い子スペースを作ることが日本人英語学習者にも欠かせないと考えられる。
(4)	研究発表	小学校	早期英語教育	桐井 誠(長野県松本市立大野川小中学校)	現場管理職から見た小学校英語運営の現実的な課題と工夫	いよいよ2年間の移行期間に入る新学習指導要領。その目玉とも言える小学校英語科。指導内容では、現在の外国語活動の指導をベースに、「定着」と「読むこと・書くことへの慣れ親しみ」が加わる。現場の様子を見れば、まだまだそのベースがままならない所へ、興味関心は文字やテストへと行っている感も否めないという逆の状況もある。同時に、一体どこからコマ数の増加分を捻出するのかは、小学校現場においては実は最大の課題である。小学校文化を生かした学習指導が効果を上げることが各所で実証されてきている中、それを壊さないカリキュラムマネジメントは管理職にとっては大きな課題である。今、模索中、試行中の教案を現場の立場からまとめ、そのメリット、デメリットを比較検討してみた。

第2日目(8月27日) 午後 第7室(305講義室) (3) 12:30 (4) 13:10

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(3)	実践報告	高校	その他	浅見道明(筑波大学附属高等学校)	スーパーグローバルハイスクールでの試み—カナダ・プリンスエドワードアイランド大学研修—	スーパーグローバルハイスクールの試みとしてSGHプログラムの一つであるカナダ・プリンスエドワード島大学研修の成果について報告します。
(4)	実践報告	高校	その他	中川 誠(栃木県立栃木翔南高等学校)・渡辺浩行(宇都宮大学)	Small Talk をとおして私の授業変容(改善)	1 はじめに 授業改善にいたるまでの経緯を説明する。 2 実践内容 取り組みと課題について5つの授業ビデオを用いて説明する。 3 結果 課題改善による授業変容について説明する。「できないこと」が「できること」へと変容していったことを挙げる。 4 考察 この4年間で改善を図った点を3つ挙げる。

第2日目(8月27日) 午後 105講義室 14:00~15:10

委員会企画(研究推進委員会)	高校生は中学英語をどの程度使いこなせるか	コーディネーター:研究推進委員会
----------------	----------------------	------------------

第2日目(8月27日) 午後 204講義室 14:00~15:10

ワークショップ1(中学校)	All in English を基本とする授業における教科書本文の理解について	コーディネーター:大場浩正・長谷川佑介(上越教育大学) 発表者:水谷桂介(上越市立城北中学校)
---------------	---	--

第2日目(8月27日) 午後 105講義室 15:30~16:40

ワークショップ2(小学校)	小学校外国語活動早期化・英語教科化を見据えたフォニックス指導の実践	コーディネーター:加藤茂夫(新潟大学) 発表者:山野有紀(宇都宮大学)、入山満恵子(新潟大学)、 鈴木久子(日光市教育委員会)、北村陽子(南魚沼市ALT)
---------------	-----------------------------------	---

第2日目(8月27日) 午後 204講義室 15:30~16:40

ワークショップ3(中学校・高等学校)	ジャンルを活用する英語の授業	コーディネーター:今井理恵(新潟医療福祉大学) 発表者:本多東子(新潟県立加茂農林高等学校)、安宅いずみ(新潟市立鳥屋野中学校)、 山口麻子(新潟市立白根北中学校)
--------------------	----------------	--